

「さるみの撰の時」をめぐって

青柳 恵介

I

『去来抄』を読んでいて誰しも気の付くことは、去来にとつて『猿蓑』はやはり大きな仕事であったということである。「先師評」には、「さるみの撰の時」という言葉が六回、「さるみの撰に」という言葉が一回出て来るが、そういう時の去来の筆は精彩を帯びている。そこには「猿みのは新風の始」という撰者去来の自負が当然にある。去来から少し離れて言っても『猿蓑』は「俳諧の古今集」（宇陀法師）であつた。

俳諧七部集の第五集にあたる『猿蓑』は、元禄四年七月に刊行された。それに先立つ元禄二年・三年の芭蕉の活動は、私達の目を見張らせるばかりだ。元禄二年三月、曾良と共に『おくのほそ道』の旅に立ち、九月大垣に到着するや否や、伊勢へ参拝に行き、伊賀に帰る。十一月には奈良・京都を回り、十二月去来の落柿舎に遊び、膳所で年を越す。翌元禄三年正月そうそう膳所から伊賀に帰り、三月にはまた湖南へ蜻蛉返りである。ここで近江気鋭の新人珍碩・曲水との三吟歌仙を巻き、それを頭に、七部集の第四集『ひさご』が成る。春の暮には、先の珍碩・曲水そして正秀らと琵琶湖に舟を浮かべて「行く春を近江の人と惜しみ

ける」の句を作す。四月、曲水の紹介で幻住庵に入る。七月末までここに滞在するが、その間も籠りきりではなく、近江から京都にかけて、よく動く。その間に、芭蕉が生誕もつとも点竄、斧鉞に熱を注いだ俳文『幻住庵記』と『おくのほそ道』が出来上がって行くのである。同時に、そうした中で『猿蓑』は構想され始めていたのである。恐るべき詩人の活動である。私は、初老をとうに過ぎた男の肉体の活動と共に、世を「幻の栖」と思い定めた詩人の精神の飛翔を畏れる。精神の飛翔とは具体的に言えば、『猿蓑』新風の動きである。幻住庵に入ってからの京都行きは、凡兆・去来と『猿蓑』編纂の相談のためだろう。では、彼らはよく師を慰めたか。慰めもしただろうが、それ以上に彼らは師に立ち向かっていった。凡兆は言うに及ばず、温厚篤実と言われる去来でさえ、師の『幻住庵記』に相当きびしい批評を加えたいらしい（元禄三年七・八月去来宛芭蕉書簡）。そうした詩人のぶつかり合いこそが連衆心というものであり、『猿蓑』をつくり上げていったと考えねばなるまい。

『猿蓑』は『ひさご』を呑み込んだ。『ひさご』の意義を尾張蕉門から湖南蕉門へ、という図式で見るとすれば、『猿蓑』の意義は地域的な蕉門を全国的な視野の中で統合

することにあつた。『猿蓑』の巻頭「初しぐれ猿も小蓑をほしげなり」の句は、実は『ひさご』以前の作だった。そういう意味でも『猿蓑』は『ひさご』を呑み込んでいる。序を蕉門最古参の其角が書き、跋を新人丈草が担当する。この新旧の取り合わせは、言うまでもなく撰者の去来と凡兆にも対応している。上方の去来の撰、江戸の其角の序という照応も見られよう。そうして、『猿蓑』の隅々まで油の乗り切った芭蕉のきらきら輝く目が注がれている。異才凡兆をパートナーとして『猿蓑』という大仕事を成し終え、後年『去来抄』を執筆する時、去来が多少身巖眞、自画自賛を書いても、それは許すべきだという気が、私はする。身巖眞の中で、師が再び生きるといふこともあろう。大切なことは、様々な人間の感情の絡み合いの中で俳諧の姿を、確かに私が見据えることだ。

II

『去来抄』に次の一節がある。

病鴈のよさむに落て旅ね哉

ばせを

あまのやは小海老にまじるいとど哉 同

さるみの撰の時、「此内一句入集すべし」ト也。凡兆は「病鴈はさる事なれど、小海老に雜るいとどは、句のかけり・事あたらしさ、誠に透逸(の)句也」ト乞。去来は「小海老の句は珍しといへど、其物を案じたる時は、予が口にもいでん。病鴈は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案じつけん」と論じ、終に両句ともに乞て入集す。其後先師曰、「病鴈を小海老などゝ同じごとく論じけり」と笑ひ給ひけり。

『猿蓑』卷之三秋に、「二句は「堅田にて」という前書で並んで収められている。凡兆は「小海老」の句がよいと言った。去来は「病鴈」の句がよいと言った。凡兆は、その「句のかけり・事あたらしさ」を透逸と見た。対して去来は、その「格高く趣かすか」を認めた。結局、議論の決着がつかず、二句とも入集したのである。この二人の言い草は、よく二人の句作の傾向も示していると言っている。『去来抄』の「修行」を見ると、芭蕉は凡兆に対しては「一句僅に十七字、一字もおろそかに置べからず。はいかいもさすがに和歌の一体也。一句にしほりのあるやうに作すべ

し」と言い、去来に対しては「句くさのみ念を入るゝものにあらず。又、一句は手強く、慥に俳意作すべし」と言っている。二人に逆なことを言っているのである。

凡兆の句は、客観的な写生に冴えを見せる。「時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり」「髪剃や一夜に金精まがひて五月雨」「百舌鳥なくや入日さし込む女松原」「灰捨て白梅うるむ垣ねかな」。こうして『猿蓑』の冬夏秋春の句を一つずつ拾って来てもすぐ解るように、慥な俳意がある。強く、鋭い。「黒木」に対する「窓あかり」、「髪剃」のさび、「百舌鳥」の鋭い声に「入日」の光、「灰」と「白梅」の微妙な白の交錯、こうした鋭い神経の表現は凡兆感覚とも言うべき彼の才能である。芥川龍之介が『凡兆に就いて』という短文で、「凡兆は只ものではない」と言っているのは、決して故なきことではない。蕉門の才人を近代文学の異才芥川が認めている点に、私は興味を覚えるが、さしあたってそれは別問題だ。『赤雙紙』は「俳諧は氣に乗せてすべし」という芭蕉の言葉を伝えるが、凡兆の本領は「氣に乗せて」作す所にあると思う。句の出来上がりに即して言えば、「句のかけり」とか「句のはしり」と言っつよい。芭蕉はそれを認め、『猿蓑』で自分の句より数多く採用した(四歌仙

を省き、「凡右日記」の句を含めると凡兆四十一句、芭蕉四十句、去来二十六句。凡兆を新風を起こすに相応しい才能と見たのだろう。が、芭蕉はそうした凡兆の強き鋭さの中に、ある弱みを見付けていた。一句の放つ豊饒な香氣、あるいは伝統的な言葉の語感の行き着く繊細さ、そうしたものの欠落が、芭蕉をして「十七字、一字もおろそかに置べからず。はいかにも和歌の一体也。一句にしほりのあるやうに作すべし」と言わしめたのである。また、そこからおのずと芭蕉の言う「しほり」が、単に感覚的な繊細さというようなものではないと解る。

凡兆と対照的であるのが去来だ。凡兆のような直截な力はない。しかし、古典によく学び、言葉一つ一つの歴史を考え、吟味して句を作る。『猿蓑』卷之五の歌仙は、去来の「鶯の羽も 刷ウツクぬはつしぐれ」の発句に始まるが、この発句は単なる写生ではない。即興感偶の句には違いないだろうが、「しぐれ」に宗祇以来の言葉の歴史を考えねばならないし、またそれ以上に『猿蓑』巻頭の「初しぐれ猿も小蓑をほしげなり」の句を去来が念頭に置いていたと考えねばならない。言葉が発酵して出来上がった句だ。去来には、それをじっと待つような所がある。『去来抄』の「先

師評」に次のようなエピソードが記されている。去来が初めて正秀亭に会し、発句に滞った。その夜、曲翠（曲水）亭に泊った時、芭蕉が「珍客なればほ句は我なるべしと、兼而覚悟すべき事也。其上、ほ句と乞はゞ、秀拙を撰ばず早く出すべき事也。一夜のほど幾ばくかある。汝がほ句に時をうつさば、今宵の会むなしからん。無風雅の至也」と去来を叱ったのである。そして芭蕉は「夜すがらいど」んだ、という。私は、このエピソードを元禄三年の秋のことと考えるのだが、すると『猿蓑』撰を目前に控え、琵琶湖西岸に臨む膳所で「夜すがらいど」む芭蕉が見えて来る。去来には「秀拙を撰ばず早く出す」ようなことが、発句でもなかなか出来なかつたのだ。そういう去来に、芭蕉は「句くくさのみに念を入れるゝものにあらず。一句は手強く、髓に俳優作すべし」と言つたのである。凡兆の大胆、去来の慎重、二人は互いにないものを持つていた。この異質の才能を組み合わせる事によつて『猿蓑』は出来上がった。言ってみれば、監督芭蕉は、凡兆をピッチャーに、去来をキャッチャーに起用したのである。

「あまのやは小海老にまじるいとど哉」の句は、属目吟である。即興感偶の句である。凡兆は、ここに写生を見た

のだらう。いかにもこの句は海士の屋の生臭さを、ぶんと放つ。凡兆がこの句を佳しとした理由は、それに尽きるだらうが、こういうことも考えられるかもしれない。

芭蕉が堅田でこの句を吟じたのは、九月である。その少し前、八月下旬に膳所義仲寺無明庵で、芭蕉・凡兆・去来は『猿蓑』巻之五の三番目に収める歌仙を巻いたと推定されている。発句は凡兆の「灰汁桶の雫やみけりきりぎりす」である。きりぎりすは、蟋蟀、コオロギである。凡兆が「小海老」の句を見た時、当然彼の頭には、自分の句があったらう。「いとど」とは、別名エビコオロギだからである。しかし、凡兆の「灰汁桶」の句と「小海老」の句は似ていない。似ているという点で言えば、『猿蓑』の「凡右日記」に収められている昌房の「桶の輪やきれて鳴やむきりぐす」の句をあげるべきである。古来、蟋蟀はよく歌によまれている。その鳴き声が、秋を表わすからである。凡兆の句も、昌房の句も、その点では同じである。それを芭蕉は直接には問題とせず「小海老にまじるいとど」という図を取り上げた。これは栗山理一先生の言う意外性だらう（『成城国文学論集』第六輯）。そして少し大袈裟に言えば、芭蕉自身の言う「黄奇蘇新のたぐひ」（『笈の小

文』）だらう。それを凡兆は「事あたらしき」と見た。

また、『詩経』国風邠に「七月在野 八月在宇 九月在戸 十月蟋蟀 入我牀下」という。これを踏んで蟋蟀をよむことも、和歌以来の伝統だった。例をあげれば、『千載和歌集』巻第五秋歌下に、花山院の「秋深くなりにけらしな葦床のあたりに声聞ゆなり」などがある。「灰汁桶」の歌仙を巻いた時より、「小海老」の句は、一層秋も深まった時に出来上がった。海士の屋で「九月在戸」のコオロギを見ること、これも一つの風流であらう。そういう確かな時の把握が、この句にはある。「灰汁桶の雫やみけりきりぐす」の句を作した凡兆には、それもびんと来た一っだらう。加えて、芭蕉は旅して海士の屋にいるのだ。必然、「きりぎりす」は「いとど」に変わる。凡兆の言う「句のかけり」に、一句を見る彼の目の働きをくむべきであらう。去来は、それを「其物を案じたる時は、予が口にもいであん」と言った。去来は、一つの持論を持っていたのである。ある時、許六に向ってこう言っている。「ほ句は曲輪の内になきものにあらず。殊に即興感偶する物は多く内成。然れども常に案ずるに内はすくなし」（『去来抄』修行）と。この場合、「曲輪の内」とは視界内と敷衍してよいだ

ろう。即興感偶するものは、視界内に多い。これはあたりまえのことである。大事なのは次だ。「常に案ずるに内はすくなし」。いつも温めている自己のテーマは、なかなかその場の視界内には存在しないものだ、という。視界内にあるモチーフをよむことが、即興感偶の句を作すこととは限らない。先に書いた去来の「鳶の羽も 刷カイツボロヒぬはつしぐれ」の句がよい例である。去来が「常に案ずる」タイプの作者で、モチーフが「曲輪の内」に少ないことに苦勞していたことは、これも先に書いた正秀亭で発句に手間取った話にもよく表れていた。この去来の持論を逆から見れば、たまたま視界内によいモチーフを見付ければ即興感偶の句は、比較的容易く案ずることが出来る、ということである。「小海老」の句が珍しいとは、去来も認めている。が、「其物を案じたる時は、予が口にもいでん」という去来は、「病鴈」の句を芭蕉が「常に案」じていたテーマの句と見たのであろう。重要なのは、モチーフを見付けることではなく、それを如何に表現として定着させるかにある、そういう主張が見えるようである。そして、それはそのまま作者凡兆への批評でもあろう。

理論でものを言う去来と、情況と自分の直観でものを言

う凡兆の意見の対立は興味深いが、議論は結着の付く性質のものではない。凡兆も去来も、互いに相手の言うことを理解していただろう。ただ少しずれている。ずれた部分は、互いの理解の外だ。それはもう批評家凡兆・去来の領域のずれではなく、実作者凡兆・去来の領域のずれだからである。そのずれは、二人に逆の物言いをした芭蕉が一番よく知っていたのである。

去来は「小海老」の句の図よりも、「病鴈」の句の情を評価した。「病鴈」の句は、「曲輪の内」の句ではない。即興感偶の句でもない。芭蕉の脳裡に映じた幻想が、発酵するようにして出来上がった句である。「常に案じたる」ものが、一つの表現に定着した句であらう。去来言う「格の高さ」「趣かすか」は、「しほり」にも通じよう。「病鴈」の句と「小海老」の句とどちらが秀れているかは扱置いて、「病鴈」の句の方が主観的で、言語の指示表出性と自己表出性が微妙に絡み合い、それだけに或る種の難解さを持った句だとは言えよう。

III

元禄三年九月二十六日、芭蕉は膳所の茶屋与次兵衛に木曾塚（義仲寺の草庵）から消息を送っている。茶屋与次兵衛は、先に引いた「桶の輪やきれて鳴やむきりぐす」の句を作った昌房である。「猿蓑」には四句の発句を載せている。

昨夜堅田より致「帰帆」候、愈御無為ニ御連中相替（る）事無「御座」候哉。拙者散々風引（き）候而、蟹の苦屋に旅寝を忙（び）て風流さまぐの事共ニ御座候。病雁の夜寒に落（ち）て旅寝哉

と申候。京短尺屋へ御状被_レ遣_□可_レ被_レ下候。明日上京致候間、拙者見合（せ）、能（く）候へばもとめ候而人々わけ可_レ申候。千那・尚白方ニも大分入り申候。以上

堅田には千那がいる。千那は、堅田本福寺十一世の住職である。消息文末に「千那・尚白方ニも大分入り申候」とあるように、千那の影には常に尚白がいる。尚白は大津の

医者である。千那、尚白共に貞享二年の春、蕉門に入った。近江蕉門の先達である。蕉風初期のアンソロジー『孤松』は、この尚白が編者だ。尚白の力は相当なものだったらしく、許六も元は尚白の弟子であった。尚白と千那の友情が厚く、死ぬまで続いたことは、荻野清氏の詳しく言う所である（『芭蕉論考』近江蕉門の分裂と芭蕉）。

消息に「御連中相替（る）事無「御座」候哉」という連中とは、昌房をはじめ珍碩、正秀、探志、怒誰（曲水はこの時江戸に下っていた）らの『ひさご』俳人とも言うべき人達である。これらの人達は、千那、尚白に対して新人である。このほとんどの人達は、もとは尚白の弟子だった。『夕顔の歌』の「老贅子行状」に「乙州・正秀・許六・洒堂（珍碩）の徒は師（尚白）が門をくぐり出て翁（芭蕉）に「調す」とある。彼ら（許六をはぶく）が蕉門に帰したのは、言うまでもなく『ひさご』からである。そして、その導き手が、千那・尚白、とりわけ尚白だった。

が、元禄四年秋より千那・尚白は芭蕉から離反して行く。これも荻野清氏の詳しく説く所であるが、尚白は『孤松』に次ぐ『忘梅』を編んだ。この序文を仲の良い千那が書いた。千那はその序文を元禄四年秋ごろに、芭蕉に見せ

たのである。芭蕉は、それを没とし、千那の名で書き変えた。これに千那は氣を悪くした。尚白も氣を悪くした。『忘梅』は元禄五年春に上梓する予定だったが、とうとう見送りになってしまった。これが千那・尚白の芭蕉からの直接の離反の原因だが、これは起こるべくして起こった事件だった。

ことの起こりは、『ひさご』以前にあった。尚白らししてみれば、子飼いの珍碩・正秀・曲水・乙州らが芭蕉に認められることは嬉しかったろうが、そうした新人達が古参の自分達を差し置き、芭蕉と結ばれるのはいい気がしなかったろう。或いは、氣の強い珍碩が指導して尚白・千那の縮出し作戦を張ったのかもしれない。そして、根本的には奥州行脚をなしとげた活動する詩人に、彼らはずいて行けなかったのだからと思う。とにかく尚白・千那は『ひさご』に加わらなかつた。その『ひさご』に対抗したのが『忘梅』だったのである。もちろん、『忘梅』には珍碩・正秀・曲水・乙州らは入っていない。『忘梅』は低調だった。もとは尚白の弟子だった許六も『忘梅』を「師（芭蕉）次第に流行したまふによつて軽みを説たまふ。このかるみのもとにおちて、今にその集ならずして年を経ぬ」と言っている。

る。（『青根が峰』）

この間のエピソードとして、『去来抄』に有名な一節がある。「行春を近江の人とおしみける」の句を、尚白が「近江は丹波にも、行春は行歳にもふるべし」と難じたのである。仲間外れにされた尚白の僻みが言わせた難だ。芭蕉は去来に意見を聞いた。去来は「尚白が難あたらず。湖水朦朧として春をおしむに便有べし。殊に今日の上^{たう}に侍る」と答えた。去来は、ことの成り行きを知っていたのだから。師を慰めるような口ぶりである。芭蕉は去来の答えに対して「しかり」と言いながら、「古人も此国に春を愛する事、おさ／＼都におとらざる物を」とつけ加えている。尾形尙氏は、その著『松尾芭蕉』で、ここにいたって初めて尚白の難が妥当でないものと言ひ得る、という。尾形尙氏は、この句を三つの顔で見ている。一つは、近江の連衆に対する挨拶吟としての顔、二つは、真蹟懐紙における自己の漂泊の人生を嘆ずる独白としての顔、三つ目が『猿蓑』に取められた「望^三湖水^二惜^レ春^一」の前書を持つこの句の顔である。尾形氏は第一、第二の顔としてのこの句に、尚白の非難は介入すべき余地がないという。その通りだ。尚白は、自分が近江蕉門の一人であるにもかかわらず、師の挨拶を

聞く耳をそもそも持たなかった。その点で去來の答えては、尚白の難は解決がつかない。芭蕉の言葉をもって、初めて第三の顔として、尚白の難は搔ね付けられたのである。連衆心という横の關係を、尚白によって切られた時、芭蕉は近江の伝統という縦の關係の中で一句を仕上げたのである。この芭蕉の冷静さは、やはり常人と違ふ所だ。

この冷静さは、芭蕉が尚白や千那を疎んじようとしたのではないこと、一つの傍証にもなるだろう。そして、その確証は『猿蓑』で、尚白の発句十五句、千那十句と採用していることである。ただ、この時尚白の限界は芭蕉に見えて来ただろう。

元禄三年九月六日附の曲水宛書簡で、芭蕉は、珍碩の土達を賞賛した後、「此辺やぶれかゝり候へ共、一筋の道に出る事かたく、古き句ニ言葉のミあれて、酒くらひ逗(豆)腐くらひなどゝのゝしる輩のみニ候。」と書き、「ある智識のゝ玉ふ、なま禪・なま仏是魔界」の前書で「稲妻にさとらぬ人のたつとさよ」という句を記している。興味深い書簡である。

近江蕉門は脱皮しようとしている、という。しかし、「一筋の道」に出る事は難しい、という。脱皮しようとしてい

る新しい力は、言うまでもなく珍碩を筆頭に正秀・乙州らのことである。しかし、近江蕉門というトータルな目で眺めた時、依然として尚白や千那の力は無視出来ない。彼らが「一筋の道に出る事」をかたくしている。私には、ここがそう読めて仕方がない。「古き句ニ言葉のミあれて、酒くらひ逗腐くらひなどゝのゝしる輩」とは他でもない、尚白や千那連のことではないか。

芭蕉が「かるみ」を主張し出したのは、この頃である。そして先に引いた許六の言によれば、尚白や千那はその「かるみ」のもとに落ちたと言う。ついで行けなかったのいる姿なのではないか。尚白の編の『忘梅』の句には「山楼銭をつかへば坂もなし」とか「手の行ぬ背中を這や蚤の知恵」というような、笑うに笑えぬ句がある。こうした言葉遣いは、「酒くらひ逗腐くらひ」などという言葉遣いに通じるものがあるのではないだろうか。「稲妻にさとらぬ人のたつとさよ」という芭蕉の皮肉は、「かるみ」を悟ったような顔をしている尚白や千那のことを言ったのかもしれない。

元禄三年九月の堅田行のとき、すでに尚白や千那との仲

は気まづくなっていた。安東次男氏の言うように、風雅を目的とした他出ならば、誰か膳所の門人を同行させたであろう(『芭蕉』孤雁)。芭蕉は一人で堅田に行った。この他出の目的を、千那・尚白に会うことに置いていたのではないか、という安東氏の推測に私は賛成である。そう考えるのが最も自然である。そして、余白に書かれた「正秀、珍碩、探志へ御案内たのミ存候。今暮より御出候様ニ奉待候」とは、「これから千那・尚白に会って来た報告会をしますから来て下さい」という意味だろう。とりあえず昌房に挨拶として「病鴈」の句を置いたのである。今度の堅田行は、私としてもちょっと辛かった、という挨拶である。と見てくれば、同じ堅田での作「小海老」の句をここに置かない理由も解るのだ。「蟹、苫屋に旅寝を佗(び)て」と記しているのに「あまのやは小海老にまじるとど哉」を書いていないのは、それが千那と会見して来た報告(挨拶)になり得ないからだ。「小海老」の句が「病鴈」の句より劣るから書き記さなかったのではないだろう。とにかく楽しい旅でなかったことの告白だ。尾形仲氏が「行く春を」の句を三つの顔を持つと言ったように、それが「病鴈」の句の第一の顔である。

其角の『枯尾花』には、「心をのどめてと思ふ一日も無かりければ、心気いつしかに衰滅して、病々鴈のかた田におりて旅ね哉」と苦しみけん」とある。この中七を初案と見る説もあるが、其角の記憶違いだろう。しかし私は、この記憶違いを興味深く思う。短詩形の持つ面白さだと思うのである。「落ちて」というのと「おりて」というのでは、全く意味が違う。客観的現象としては同じであるが、主体の動作としては反対の意味を持つ。前者には主体の意志はない。「落ちて」しまうのである。後者には、主体の意志がある。「おり」ようとして、地面に近づくのである。何故、其角は「おりて」と誤ったか。言うまでもない。病鴈と芭蕉を一本化して見過ぎたためである。「心をのどめてと思ふ一日も無かりければ」の主体が芭蕉なら、「心気いつしかに衰滅して」の主体も、「苦しみけん」の主体も、あたりまえのことながら芭蕉である。ここで其角は「病々(芭蕉)のかた田におりて旅ね哉」という読みをしている。この場合、「おりて」は「泊って」という言葉の同義語に等しい。これが「落ちて」では相応しくないのである。更に其角の心理に立入れば、「心をのどめてと思ふ一日も無かりければ」は、「おりて旅ね哉」に掛かって来るだろう。

この場合、「落ちて」では全く何の意味も成さないのである。其角の中七誤記は、ある芭蕉のイメイジを追って行って、起こるべくしく起きた誤記である。「心をのどめてと思ふ一日も無かりければ、心気いつしかに衰滅して」という文章が（あるいは、そういう類の発想が）なかったなら、「落ちて」を「おりて」と間違わなかったと思われる。イメイジに連関して、言葉が微妙に変化するいい例を示している。

では、ここから酌み取れる其角の芭蕉に対する、あるイメイジとは何であったか。それは堅田で風邪を引いて苦しんだ芭蕉のイメイジなどではない。また持病の胆石に苦しむ芭蕉のそれでもなかるう。其角は、「心気」「衰滅」と言っている。それを具体的に言えば、近江蕉門の新旧勢力の葛藤における心気衰滅ではなかったか。其角は、今知っている、尚白や千那を捨ててまで、芭蕉が高く評価した珍碩は、とうとう師から離れてしまった事実を。そして、珍碩は師の死の床に見舞いにも来なかったという事実を。そういう結果を知りつつ、其角は回想する。蕉門勢力自体の「無常迅速」の中で、『猿蓑』を作り上げ、「不変の変」（其角の『猿蓑』の序）「一筋の道」（芭蕉の曲水宛書

簡）を打ち立てようとする苦しむ芭蕉のイメイジこそ、其角の頭に宿っていたはずである。去来によれば、芭蕉はもう元禄二年の冬から「不易流行」の教えを説き始めていたという。実際は、芭蕉は飛翔を続けていたのだった。

IV

「病鴈」の句の第二の顔は、いまの其角のイメイジとも重なる所のある、『横平集』のありかたである。前書に「かたどにふしなやみて」とあり、これは真蹟の短冊によるという。もう、ここには膳所連衆への挨拶はない。あるのは、芭蕉が旅で病んだ流離の情である。寒気迫る夜陰の中で、芭蕉は病に臥す。それは、『おくのほそ道』の次の文章と通じる。「夜に入て雷鳴、雨しきりに降て、臥る上よりも、蚤蚊にせよられて眠らず。持病さへおこりて消入許になん。」ひとくちに言えば、「捨身無常の観念」である。ここでは、前書に「ふしなやみて」とあるのだから、「病鴈」は芭蕉のメタファーか、シンボルと見なければならぬだろう。

第三の顔は、「堅田にて」とだけの前書を持つ顔である。

もうここにいたれば、一句は自立する。ここで傾聴すべき説は、宮本三郎氏、井本農一氏、栗山理一先生らの説である。「病鴈のよきむに落て」で主格の転換があり、「旅寝かな」の主格が芭蕉自身と見るのである。芭蕉の使う「て」という助詞には、そういう用法がある（たとえば「田一枚植ゑて立ちさる柳かな」詳しくは栗山先生の『芭蕉の俳諧美論』にある）。すると、たとえば『千載和歌集』の源雅光の「さ夜深き雲居に鴈も音すなり我独りやは旅の空なる」という歌が浮かんで来る。「旅宿鴈」である。しかし、芭蕉の句は雅光の歌ほど呑気ではない。この歌にはない冷たさを、「病鴈」の句は持っている。それは言うまでもなく、

「病」と「落」である。鴈が病んでいるために、そしてその鴈が落ちるために、芭蕉は「我独りやは旅の空なる」とは言えなくなるのである。が、雅光の歌と芭蕉の句の質の違いは、それだけだろうか。

確かに、「て」が切字である以上、「病鴈」が夜寒に落ち、私は旅寝をする、という文脈は正しい。さらに、茶屋与次兵衛宛書簡・真蹟短冊（『横平集』による）で、芭蕉自身が病んだという事実を、『猿蓑』では消している。『猿蓑』の「堅田にて」という前書だけでは、芭蕉が病んだと

いうことは解らない。だが、切字は切ってしまう働きだけのものでなく、切って継ぐ働きを持つ。つまり、旅寝する芭蕉と夜寒に落ちる鴈とは、絡み合っている。あるいは、響き合っている。その微妙な絡み合いや、響き合いの中にこそ詩がある。「て」という切字の効用であろう。こうした、たった一字で保っている詩の世界こそが、雅光の歌の世界と根本的に異なる所だ。そして、それを去来は「趣かすか」と指摘したのではなかったか。また去来は『旅寝論』で、「淋敷ものに淋しき物をむすび、めでたきものに淋しからぬ物を結び、目出度物にめでたからぬものを結び、一句をよく首尾したるは作者の働也。古人も作の跡の見得ざるを以て、上品の沙汰有。猶先師の病鴈の夜寒に落て、といへる句のたぐひならん」と言っている。この場合、淋しいか、めでたいかななどはどうでもよい。それぞれ情の伴う首尾を、うまく結ぶことが作者の働きであり、その作意が目立たぬ自然な作こそ、上品の沙汰ある句だ。その代表的なものが、この「病鴈」の句と云うのである。要するに、病鴈の情と芭蕉自身の情が、よく首尾照応し、且つきわめて自然だと言ふのだ。諸家が様々な漢詩とこの句を比較しつつ、芭蕉の詩心を考えているのも、絡み合う病鴈と芭蕉

自身の位置どりを考究しようとする試みに発しているのだらう（たとえば、白居易の「病中对病鶴」、杜甫の「孤鴈」、崔塗の「孤鴈」など）。こうした世界に立ち入って来れば、芭蕉が堅田で実際に風邪をひいたなどということとは、文字通りの事情に過ぎなくなる。それで『猿蓑』では敢えて「堅田にて」という前書だけにしたのだらう。

さて、『去来抄』には後日譚がある。芭蕉が「病鴈を小海老などと同じごとく論じけり」と笑ったというのである。もしかすると山本健吉氏の言うように、去来の曲筆が

あるかもしれないし（『芭蕉』）、事実としても少し説明を欠いている。が、一応忠実に考えれば、「小海老」の句は一つの顔しか持たぬが、「病鴈」の句は、複数の顔を持つ。それを同じように論じたのが芭蕉にはおかしかったのかもしれない。だが、それとは別に、この芭蕉の笑いの中に一仕事終えた男のヤレヤレという気持が読みとれないだらうか。それは他でもなく、芭蕉の笑いに託した去来の気持でもあったらう。

芭蕉は、「かるみ」を以って、また飛び立って行く。